

立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）
プロジェクト研究（共同プロジェクト研究）
2017年度研究【経過・成果】報告書

研究代表者	所属部局・職		氏名			
	社会学部・教授		是永 論 印			
研究課題	家庭におけるメディアの利用を通じた大人と子どもの相互行為実践に関する研究					
研究組織 (研究代表者・ 研究分担者) 2018年3月現 在	所属研究機関・部局・職		氏名			
	立教大学・社会学部・教授		是永 論			
	立教大学・社会学部・助教		池上 賢			
研究期間	2017年度 ～ 2018年度					
研究経費※ (上段:支出金額)	2017年度		2018年度		年度	総計
	2,176,654	円		円		2,176,654 円
(下段:採択金額)	2,275,000		714,000			2,989,000 円

※1円単位で記入

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、書籍や新聞などの従来のメディアに加えて、スマートフォンなどの情報機器の利用を通じて、主に家族を中心として住居内で行われる大人と子どものコミュニケーションについて考察することを目的としている。このとき、相互行為を映像に記録し、特定の住環境における空間配置に従って、相互行為が展開する過程に着目しながら、生活上の行動とメディア利用との関係について、エスノメソドロジーの視点から検討する。それにより、メディアの利用が特に子どもの知識獲得に対して、どのような効果を及ぼし得る可能性があり、さらにその可能性に照らして、家庭においてどのような実践が望ましいのかを、特に「学習」という観点から明らかにする。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[家庭] [相互行為] [メディア]

研究【経過・成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

現代社会において、スマートフォンに代表される情報機器の普及と遍在により、生活におけるあらゆる場面においてメディアの情報が関わってくる機会が非常に多様な形で展開している。そうした状況はまた、従来の書籍や新聞・テレビなどのマスメディアによる情報の受容から、インターネットを介した双方向的なメディア利用への移行として、情報と生活の関わりにおける質的な変化をもたらしている。

そして、そのようなメディア環境と情報環境の変化によって現在大きな変化を迎えていると考えられるのが、家庭という空間である。まず、情報の受容やメディア利用においては、従来は主に利用者個別によって受容が行われ、また利用についてもそれ自身に専念した行動としてなされてきた(従来は共同利用されていたテレビについても、近年は録画機能の発展とともに、利用の個別化にともなう多様化が急速に進んでいる)。また、情報の受容ないしメディアの利用それ自体も、利用者個人によって一定の意図をもって意識的になされていた面が大きい。これに対して、近年ではメディアの利用自体は個別であっても、利用形態としても他のメディアや生活行動と並行した、いわゆるマルチ・タスク的な状況が展開している。また、ネットに接続した家電が生活者の情報をビッグ・データとして提供する形になるなど、いわゆる「モノのインターネット化(IoT)」によって、生活行動自体が意図しない形で情報を発信するといった事態も今後生じる可能性がある。

以上のような背景から、本研究は、一般家庭の住居における、特に子どもによるメディアと情報の利用活動がどのような特徴を持ち、また、どのような過程を経て行われるのかについて明らかにする。このとき、両親をはじめとする他の家族構成員が、どのように協同的にその活動に関わり、またその関与が活動の実践についてどのような意味を持ち得るのかについて、主に相互行為の構成上の特徴に基づいて検討する。さらに、メディアに関わる相互行為が協同で構成されるときに、住宅としてデザインされた空間の配置が、どのように作用しているのかに特に着目しながら、その空間で営まれる生活行動への展開にどのような影響を与え得るのかについても、相互行為を構成する過程との関わりを中心に明らかにする。

上記のような研究方針のもと、初年度である 2017 年度では、研究組織の各人がそれぞれの専門領域での個別の研究を行う一方で、研究協力者であるミサワホーム総合研究所のメンバーおよび他大学の研究者とともに、下記の活動をおこなった。

①定期のデータセッション開催

前年度までを含む、これまでに撮影した家庭での相互行為場面について、毎回 2 名ほどの担当者が分析内容および暫定的なファインディングを映像データとともに報告する各回 2 時間程度のデータセッションを計 9 回開催した(4 月 25 日、5 月 16 日、6 月 19 日、7 月 25 日、8 月 25 日、10 月 6 日、11 月 10 日、12 月 15 日、翌年 3 月 7 日、なお翌年 1 月 16 日は担当者疾病等のため中止)。

報告内容においては、片付けや調理の場面における家庭活動に関する学習内容のほか、作業時の姿勢と互いの身体のポジション、成長にともなう親子間のコミュニケーションの変化、宿題など家庭での教科学習に取り組む環境の問題など、家庭での学習の背景となるコミュニケーションの様子とその環境を中心に、多様な視点からの検討がなされた。

②調査対象家庭でのビデオデータ撮影における検討と実施

本研究課題の実施にあたっては、スマートフォンなどの情報機器を利用した相互行為場面のデータ撮影を当該家庭には依頼していたが、スマートフォンの画面内容が小さく、また相互行為の様子も微細であるため、分析に支障が大きいことから、研究データとしての独自の収集方法をデータセッションの機会に合わせて検討した。結果として、スマートフォンと同型のアプリケーションを備え、画面をプロジェクターとして投影しながらタッチ操作が可能な新型の情報機器(Xperia touch)を導入し、その利用に関する相互行為場면을撮影することにした。撮影には機器の設置や操作の慣れに相当の時間を要したため、データとして収集した時間は 23 時間程度になった。今年度分として収集した当該データの整理は次年度にまたがるため、本格的な分析は次年度になるが、本機はスマートスピーカーの機能も備えており、音声だけでの操作が可能である一方で、大画面でのタッチ操作による学習用の動画やゲームの利用など、これまでになかったメディアの利用形態が研究対象となり、新たな知見がのぞめるものと期待される。

研究【経過・成果】の概要 つづき

今回の研究計画で独自に収集したデータによる分析内容を用いた研究としての展開については、研究代表者が年度途中(8月以降)に眼の疾病により、研究活動の継続に一時期支障が生じたため、対象者へのインタビュー・データが収集できなかったことなどにより、限定的なものにとどまったが、次のような成果を得た。

③研究発表による分析概念についての情報交換

2017年の7月には、アメリカ合衆国オハイオ州コロンバスのオッターベイン大学にて開催された、エスノメソドロジー・会話分析国際会議(IIEMCA 2017)において研究発表を行った。発表内容については、次項の④として作成した論文の内容とほぼ重なるのでそちらに譲るものとするが、主に前年度までに収集したデータをもとに分析を行ったもので、今回の直接の研究対象とは異なるものの、親子間におけるコミュニケーションの特徴をどのように分析するかについて、特に重要となる「成員カテゴリー化装置」という分析概念をめぐる、発表後における海外の専門の研究者と情報を交換することによって、非常に有益な研究上の視点を獲得することができた。

「成員カテゴリー化装置」という概念を用いた分析は、エスノメソドロジーの分野において「成員カテゴリー化分析(membership categorization analysis, MCA)」という独立した分析手法として成立しており、近年は海外の研究者により特に注目されている(Fitzgerald & Housley (eds.) 2015など)。人物どうしの関係について、人々が主に言語使用場面について、{家族}などのカテゴリー集合を適用しながら理解を実践しているとする、この概念は、現実でのコミュニケーション場面だけでなく、メディアにおける表現上の人物関係を理解する場合においても、重要なはたらきを持ち、研究代表者もその概念を検討した研究を今年度初頭に書物として公表をしている(是永2017)。以上を含む、今回の研究発表を計画・実施した経緯から、実際の家庭におけるコミュニケーション場面を分析する際の有効性について検討することが可能になったほか、発表後の情報交換などを通じて、次年度以降に、研究対象者の人々がメディアの内容を理解する際に、そこで描かれる人物の行動と、現実における自らの行動を、成員カテゴリー化装置を通じてどのように結びつけるかといった分析上の視点を獲得することができたのは、今回の研究計画全体においても大きな成果となった。この成果は、今年度末の2018年3月に研究代表者が行った、国内のエスノメソドロジーの学会機関である、エスノメソドロジー会話分析研究会(emca.jp)における研究報告にも活用され、さらなる概念の検討を進めることとなった。

以上のほかにも、研究分担者がマンガ読者を対象にしたインタビュー調査から、メディアの表現内容の理解について理論的な検討を行った研究(池上 2017、池上・足立 2017)や、研究代表者が参加した現在におけるメディア利用の実態に関して5か国の国際比較調査を行った研究(橋本ほか 2018)においても、今回までに収集したデータについて、今年度実施したデータセッションなどによって得られた知見を反映している。

④海外学術雑誌への投稿を前提とした論文の作成・内容の検討

③における研究報告を英語論文(Korenaga et al. 2018)としてまとめ、海外学術雑誌への投稿を前提に内容の検討を行った。論文内容としては、親子のコミュニケーションにおける評価(assessment)の行為連鎖に注目し、親が子どもの行為の評価をどのように行うかを分析する一方で、子どもの方が成員化カテゴリー装置を用いてどのように行為の理解を位置づけるかについて、学習的な観点から考察した。分析対象としては、メディアの利用場面ではなく、主に片付けを行う場面のコミュニケーションが中心となったが、分析に際しては子どもが絵本を読んで片付ける場面を含んでおり、情報内容の理解とは異なる対象ではあるものの、書物を介在したコミュニケーションの場面として分析を行ったことは、家庭という空間におけるメディア利用について、モノとしての物的な面から考察を行う上でも、今後において中心の一つとなる研究視点を展開する契機となった。論文投稿については、2018年2月に共同の研究会を開催して会話分析の専門家からのピア・レビューを受け、いくつか改良すべき点を指摘されたので、次年度にさらに検討を加えたいうえで、適切なジャーナルを選択して投稿する予定である。

以上のように、今年度としては独自の分析データを収集し分析することよりも、既存のデータを用いた分析概念の検討と、多様なメディア利用状況を含む、それらの現実場面への適用可能性を検証することが中心となったため、これを今年度収集したメディア利用データの分析にどのように活用しながら、研究知見として産出していかという課題が次年度に残された。

※ この(様式2)に記入の【経過・成果】の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 論文

池上賢, 2017, 「マンガ経験とナラティブ・アイデンティティ——マンガ経験をリソースとしたナラティブ・アイデンティティの対話的構築」『マス・コミュニケーション研究』91, 103-121.

北村智、橋元良明、是永論ほか 2018「情報行動と社会意識に関する国際比較 ——「日本人の情報行動調査」プロジェクトにおける日中韓星米 5 カ国オンライン調査」、『東京大学大学院情報学環 情報学研究 調査研究編』34号、119-212頁

④ 学会発表、研究報告

Ron Korenaga, Satoru Ikegami, Ippei Mori, Tomoko Endo, Kei Aoyama, Akio Tomita, Yoko Morimoto, Asako Ohara, Hideki Nishio, Takako, Hanada, Megumi Hasegawa, 2017, Practice of learning through children-caregiver interaction: A case of cleaning-up activity”, IEMCA 2017, Westerville, Ohio, USA. (2017年7月)

池上賢・足立加勇 2017 「マンガ読解におけるコミュニティ内で共有されたリテラシー (1) ——マンガ読者は「何を」「どのように」読み取っているのか？」日本社会学会第90回大会口頭報告 (2017年11月)

是永論 2018「MCAの課題としての glance-intelligible」、エスノメソドロジー・会話分析研究会研究例会企画セッション・シンポジウム「成員カテゴリー化装置を再考する」(2018年3月)

Ron Korenaga, Satoru Ikegami, Ippei Mori, Tomoko Endo, Kei Aoyama, Akio Tomita, Yoko Morimoto, Asako Ohara, Hideki Nishio, Takako, Hanada, Megumi Hasegawa 2018 “The practice of learning through children-caregiver interaction: A case of a tidying-up activity” (未公表)

以上